太棹

第百三十三號

昭和十六年三月廿八日
第三種郵便物認可

昭和十七年三月十日 印刷納本
昭和十七年三月十日 發行

（毎月一回廿五日發行）

太棹（第百三十三號）

野澤道之助待合を始めた
三度に一度は行かずばなるまい
ズンベラ〳〵
向島にて十六島田が出て來て（サアビス）
酒も梅よし行かずばなるまい
ズンベラ〳〵

本所區向島須崎町九五
御待合　梅よし
電話墨田四七五五番（シナイイ）
水島春枝
道順（須崎町電停より半丁先交番前電車通りを左へ入り右へ曲って二軒目）

淺草區雷門二丁目一九
淺草宅　野澤道之助
電話淺草三七九番（ミナク）

松幸
すき燒
和洋御料理
淺草公園（千束二ノ三四）
牛鍋本店
電話根岸(87)〔〇三八〇番 二〇〇〇番〕

風流・金ぷら・茶漬
（美地句）
吉田屋
新橋二ノ八
電銀二〇八

太棹

第百三十三號目次

初春の文樂座……西尾福三郎（二）
松王の鉢卷・其他……紅雨莊主人（四）
文樂人形小道具帖……宮尾しげを（六）
近頃太棹競奏曲……伊藤紅二（八）
新春偶語……紅雨莊主人（一三）
文樂樂屋圖譜……宮尾しげを（一九）
白茅亭雜記……芳河士（二〇）
太棹社彙報……（二一）
會報・消息……（二七）
編輯後記……芳河士記

表紙・カット……齋藤清二郎

初春の文樂座

西尾福三郎

昨夏津太夫の歿後久しく空位のまゝだつた文樂座の櫓下が、秋に到つて古靱太夫によつて系承される事に決定したが、その披露が年改まる紀元二千六百二年匆々に行はれる事となつた。時は恰も赫々たる戰捷に躍やく大東亞曙の希望に燃ゆる午の歳、清々しい床御簾の赤地金襴も眞新しく、その上部に三つ柏の定紋を打ち出し、豊竹古靱太夫と筆太に箔打たれた銀文字も燦として何も彼もが力强く生々としてゐる。慇ひ業々しい積物や、華美な飾り物が澤山竝べられてないのが却つて古靱太夫その人の奥床しい人柄を偲ばせて、質素な中に重々しく頼もしい氣配さへ感じられて一層心强い極みである。

上演時間の制限や、入場税の增高にも拘らず文樂だけは例外とあつて、正月は一時半の開演で七時間たつぷり堪能させやうと云ふのである。その爲か何か知らぬが例によつて上演曲目が六種類の盛澤山、この外に幕合のニュース映畫や新曲未廣狩の引ぬきを加へると實に眼眩しい許りの山盛りで、何れも正月料理並に種類許りが數多くて、さて食指を動かさうとなると何から手をつけてよいやら分らないと云ふのがおちである。

正月早々からの憎まれ口は自分乍ら一向感服せぬが、今少し上演曲目に注意して、せめて三四種位に限定するとか、或は思ひ切つてこの月は客が來るのは決つてゐるのだから一そ通し狂言二種位で明けてみたら何んなものか、何れにしても選り取り見取り摑み取り式な竝べ方だけは以後充分に注意してほしい。

今月のだし物六つの内、古靱の熊谷陣屋のみが一きわ强く印象に殘る許りで、他の五種は何が何やら空々漠々今思ひ返してみると一體外に何と何とをやつてゐたのかそれさへ茫然に思ひ出せない程印象が散漫且つ稀薄になつてしまつてゐる。勞して効なしとはこの事である。レビューのやうに見た眼限りで後は霧のやうに消えて無くなつてしまふものならとにもかく、尠とも文樂のだし物だけは、くり返し〳〵して味はひ娯しみ得るものであつてほしい。

眼目の熊谷陣屋は古靱としては全る二年振りの語り物である。津太夫の櫓下披露狂言もこれであつたが、今更ら申す迄もなく大物中の大物である。本來だと、直門の織太夫あたりが前を承るべき筈だが、これも今回は大隅と清二郎が務めてゐる。消息通と稱する人々はこうした組合せの中から文樂座の次の時代の空氣を嗅ぎ出さうと

するかも知れない。これより先き古靱は昨年來東京興行を打上げた直後、折から無理した後らしい難聲をもつてこの前段須磨の浦を放送してゐた。彼斯相俟つて、櫓下の貫祿に於て大物一の谷の二、三段目を完全に近く演出し得た次第である。須磨の浦は何分ラジオと云ふ惡條件の上に、時節柄の電波關係で充分な出來とは申せず　讒かに清六の絃が比較的電波の難を克服して良くきゝ得た程度であつた。前述のやうに津太夫の櫓下披露にこの陣屋が出た時、兄弟子の榮位に花を添へるべく、その時も古靱は須磨の浦を語つたのである。それは大正十三年五月の事であるから、爾來約二十年の歳月を隔てゝ再びその須磨の浦と、そして陣屋とをこゝに連續してきゝ得たのであるから、語る人もきく者にも、俱にいさゝかならず感慨なきを得ざる譯である。文樂としては珍らしい長期の二十五日興行と、猶その翌日のラジオ放送と都合二十六回の陣屋を完全に語り終つた事は何と云つても偉とすべきである。いつもならば二十日前後の興行に半分は大抵聲をつぶしてしまつてゐるこの人であるが、今回は一生一代の大切な場合とて一層緊張した結果か、ともかくも大した差違も感ぜしめずに首尾一貫し得た事も目出度い限りである。全段の内でも取りわけ絶唱は後段有髮の僧の條りであつて、「その傳ふべき子を先立てから以下、一悴小次郎が坡がけしたる九品蓮臺……の妙と、特に「十六年は一と昔のところが、今更ら乍ら強い感銘を呼起させた。絃、人形共に今さら取立てゝ褒める迄もなく結構であつた。今回特に印象に殘つたのはいつもだとこの場は大抵人形出遣ひにするのを、今度は全部黑衣でやつてゐた。普通だつたら無いものでも無理に花飾りして興を添へたい一世一代の晴の舞臺を、かく地味に堅實に古格通りに表現した事は遺がにこの人の床しい心掛けが伺へて好感が持てる。その代りと云ふ譯でもあるまいが、他の五つが五つとも全部出遣ひで　中には無くもがなと思はれるものもあり、折角新櫓下での權威も自分自身のだし物以外には及ぼし得ぬかと思はせて殘念である

陣屋に許り筆を費して他に言及する餘裕が今回はなかつたが、右の外、序の御所三では綱造の絃で七五三太夫の辨慶一本の外、他の段は二、三人が毎日代りである。こゝでも七五三太夫は綱造に彈きまくられて聲許りの辨慶を語つてゐる。其他織太夫等の炬燵も感心せず、むしろ末廣狩の狂言種から出た淡白味が、從來のイキんだ新作よりあつさりと取扱はれてゐた點に好感が持てた。

切りの千本櫻道行きは何の爲か知らぬが重太夫の靜御前を本床にして、住太夫の忠信を仮床に据え兩床の演出方法をとつてゐる。「靜は皷を御顏と……から雁と燕の前までを新左衛門の絃が受持つてゐるが、これだけをきけば外に取立てゝ何も印象に殘るものはない。

以上今月は筆者多忙のため、單なるかけ走の見物記になつてしまつた事をお詫しておきたい。

松王の鉢巻・其他

……三宅周太郎氏の『續文樂研究』……

紅雨莊主人

三宅周太郎氏の「續文樂の研究」が出たので何はさておき取寄せて、未讀の諸書を後廻しにして一讀した。跋文によれば前著「文樂の研究」以上の自信作のやうであり、見た所大半は新聞記者の藝人訪問記のやうな記事のやうだが、其藝人の話には聞くべき事が多い。寺子屋の研究は未發表の贈物とあるが、是亦面白い。

頭に殘るものもいろ〳〵あるが、全卷三四個所に寺小屋の松王の鉢巻の事が書いてある。相憎病後で同書を一々參照する事は出來ぬが、其主意は、松王が首實檢をする時に例の鉢巻を取るか、あれは緊張を缺ぐやり方で、取らぬ方がよくは無いか、といふにある。何故取るかについて榮三は菅秀才に對する禮儀だらうと云ひ、文五郎はどちらでもよからうと云つて居る。そして結局榮三が最近に鉢巻を取らずに演じたやうで、初めのうちは十分の自信の無さゝうであつた三宅氏も、大に喜んで、流石榮三だと賞めたり喜んだりして大滿悅の樣子である。

榮三が鉢巻を取らずに首實檢をしたのが一度切りの試みならよいが、若し本當にかう改めたのなら、も一度よく考へて見てはどうか。

三宅氏の意味は、鉢巻の取り方が演技宜しきを得なくては氣が拔けるといふのでなく、折角してゐる鉢巻を肝腎な所で取るのは折角の緊張を弛めるものであるといふのにあるらしい。併し松王の鉢巻はさァ來いといふ緊張の鉢巻では無く、病氣の爲め頭が痛いので夫禮乍ら御免蒙つてしてゐる鉢巻であるから、いざ首實檢といふ大事な場面になると、居ずまゐを直し、衣紋を直し、鉢巻も取つて、儀容を整へて實檢に取り掛る。即ち鉢巻を取るのは緊張する意味であつて、緊張を弛める意味にはならぬと思ふので、人形が鉢巻を取るのは誠に尤もなやり方で、よい演出だと思ふのである。從つて鉢巻のまゝ首實

檢するなどは、病人が南瓜でも買つてゐるやうで、却つて變だと思ふのである。

首實驗の濟んだあとは、すぐに病氣保養がしたいといふ程ぐつたりして居り、痛かつた頭ならもう一度鉢卷をすべきでもあらうが、もう見物は鉢卷の事など忘れて居り、其まゝ褥に入るのが自然である。

それからも一つ、源藏が首桶を据ゑた時に三人が見得を切るのが人形獨得の型だといふ事で、それは源藏の、「打ち奉る」で太夫に間と思ひ入れとを與へる爲め、床の息に合はせてする所作で、源藏が首桶に手をかけると松王が氣にして手を出しかけるといふやうな所作があるとしてあるが、此點もどんなものか。人形の事はよくは知らぬが、「是非に及ばず菅秀才の御首打ち奉る」と源藏が悲痛な宣言をすると、菅秀才でなくて吾子小太郎の首だと知つてゐる松王は、親子の情でわれ知らず首桶に手が延びる、源藏は首桶の蓋を取るのが生死の境で、僞と云うたら一打にせねばならぬ場合だからさうだしぬけに蓋を取られては困るから、一大事と斗り蓋を押へる。親子の情と命掛けの氣分とが釀し出す強い緊迫を玄蕃も感じて、こゝに三人の大見得となる。そして「サ、云はゝ大切ない御首、性根を据ゑて松王丸云々」となり忍びの鍔元を寛ろげる、松王が笑つて「何のこれしきに性根どころか」と云ふのも首桶に手を延した氣持と關聯があると見れば一層面白い。よいか惡いかは別として人形ではこう云ふ段取でやつてゐると思ふので、「打ち奉る」を語らせる場つなぎではなく、松王が首桶に手を延すのも、源藏が其蓋を押へるのも、見得を切るのも、いづれもそれ〳〵十分の意味があると思ふのである。

序に、同書には「新口村」の孫右衛門の目かくしの事が書いてあり、目かくしを上げると見物が笑ふといつて古靱太夫が氣にするので、梅川が取つて了ふ事にしたのだと云ふ。人形は折々見物を笑はすやうに出來て居り、此場合も笑つて大して打ち毀しとも思はぬが、若し氣になるなら、暫くは目かくしのまゝの捜り手で親子のあはれな別れを見せ、最後にたまりかねて目かくしを上げて顏を見て、其まゝつゝ伏して抱き合つて了ふといふ風にやつて見てはどうであらう。目かくしを上げて見て、梅川を見てあはてゝふさぎ　又あけて見て又ふさぐといふのは客を笑はせて一息ぬかす仕方であつて、五郎の喜悲劇の遣り口であり、人形だけに可笑味もある代りに大して邪魔にもならぬやうに思ふが　これを厭がつて目かくしを梅川に取らせると、梅川のした處置は一種のペテンになり、孫右衛門としても目かくしがあればこそ見えぬと云ふ建前でゐられるが、取つて了つては同席出來ねといふ事になる。私は初めて梅川が目かくしを取る仕方を見た時に、新工夫らしいが少しエグツ無いと思つたが、今度知つたやうな成行から變へたのなら、も少し工夫が有らうかと思ふ。（一七、一、二三）

文樂人形小道具帖（六）

宮尾しげを

朝顔日記

序

やくをじゆ箱入　一ケ
白毫　一ケ

れゝら濱

やくをじゆ　一ケ
てしま莫蓙　一枚
船かい　一式

螢狩

床ぎ　一ケ
短冊　一枚
矢立　一ケ
三味線　一ケ
盆に盃かん鍋　一式
文箱　一ケ
巻狀　一本

眞葛原

金包　一ケ
盆に茶碗　一ケ
鍋にほづか　一ケ

床木　一ケ
藥紙　一ケ

弓之助屋敷

朝顔植木鉢　一ケ
桶杓子　一ケ
包紙　一ケ
煙草盆　一ケ
巻狀　一本
竹籠縄くゝり　一ケ
文箱　一ケ
振分荷物　一ケ
妻折傘　一ケ

明石浦舟別

琴　一ケ
女扇子　一本
舟櫓　一本
煙草盆　一ケ

摩やケ嶽

手洗鉢　一ケ
ひしやく　一本

帳箱　一ケ
帳面　一冊
硯　一ケ
にんじん　一ケ
さんごじゆ　一ケ
書付け　一本
圍爐り　一ケ
土瓶　一ケ
たれかご　一ケ
てつきゆう　一ケ
守ばこ　一ケ
守　一ケ
巻狀　一本
ふ箱　一ケ
小づか　一本

宿屋

藥紙　二ツ
金包　二ツ
茶釜　一ケ
風呂　一ケ

茶びしやく　一ケ
茶びしやく立　一ケ
鉢菓子　一ケ
こほし　一ケ
茶ばこ　一ケ
巻狀　一本
煙草盆　一ケ
衝立　一ケ
琴　一ケ
女扇　一本
藥紙　一ケ
金包　一ケ
硯　一ケ
たゝみ　一枚
竹杖　一本
土瓶　一ケ
槍　二本
挾み箱　二ケ
棒杭　一本
砂籠　二ツ
小石　一ケ

みづのみ　一ケ
妻折笠　一ケ

妹背山

大序

はこ　一ケ
かま　一ケ

小松原

みのかさ　一ケ
しようぎ　一ケ
ふきやづゝ　一ケ
挟み箱　一ケ
槍　一本
ふき矢　一本

ゑみし館

ゆき人形　一ケ
火鉢　一ケ
盆　一ケ
駒下駄　一足
ひとね　一枚
一巻　一本
弓矢　三組
さしかけ傘　一本
銚子　一ケ
盃　一ケ
三寶　一ケ
懐剣　一本

三笠山

鹿　一疋
弓矢　二組
つぼ　一ケ
割り竹　澤山

芝六住家

三寶　一ケ
盆　一ケ
風呂敷包　一枚
帳面　一冊
書出し　一枚
膳　一枚
褥　一枚
鼓　一ケ
つぼ　一ケ
疊　一枚
つくゑ　一ケ
硯箱　一ケ
卷狀　一本
布團　一枚
屏風　一個
たから箱　一ケ
鏡袋　一本
こづか　一本
とりなわ　二本
十手

花渡し

櫻花　二本
花づゝ　二ケ
褥　一枚
馬　一疋
しやく　一本

山の段

雛人形　一式
雛道具　一式
駒下駄　二足
經机　二ケ
金だらひ　一ケ
紅ばち　一ケ
はけ　一ケ
結び文　二ケ
さしかね　一本
硯箱　一ケ
女切り首　一ケ
小づか　二ケ
櫻花持枝　二本
ひすごき　一本
さらだ紐　二本
三寶　一ケ
九寸五分　一本
柏の葉　一枚
手洗鉢　一ケ
ひしやく　一本
さらゑ　一本
男切首　一ケ
花づゝ　一ケ
文箱　一ケ

杉酒屋

短冊　一本
やつ足　一ケ
あらこも　一枚
小田卷　二ケ
酒道具　一式
團扇　一本
井戸繩　一本
しゆろ箒木　一本
ほゝづき　二ケ

道行

小田卷　二ケ

御殿

檜扇女　八本
同男　一本
島臺　四ケ
三寶　一ケ
さかづき　一ケ
大よし　一ケ
竹箒木　二本
德利　一ケ
みぎーよ書　一ケ
煙草盆　一ケ
横笛　一ケ
槍　四本

近頃太棹競奏曲

べらくざわふいだぎろどかち

伊藤紅二

近頃、一念發起したとでも云ふのであらうか文字通り目口のあかぬ程のせわしい中を、ひまを偷んでやり出してゐることがある。

「太十」のさはりの研究である。

前々から聞いてゐたことではあるが、「太十」を十分にマスターすれば、先づ素義連の中ではかけ出しから一歩を先んじたあつかひを受けると云ふことであるが、その「太十」を今から始め出したのであるから六十の手習ひまでにはチト間もあるけれども、所詮、大したことはありえやうがない。

然し、當の自分は大得意で、例の

尼ケ崎の段
太功記　十冊目

を毎日の樣に出しては味噌桶の蓋に用心をし乍ら、おつ始めるのである。

〽一間へ入にけり……

をまき出す前に「テテン」と來るやつがとてもうれしいのだが、とてもそれ迄に凝るわけにも行かないから、この所、口三味線よろしくあつて、おくりを丹念に十二分に、扨て臍下丹田に力を入れるのである。

あのおくりのふくらます樣子、氣どつた落つきのある所が身上で、凡そ義太夫の醍醐味はあそこでつきてゐるとも云へると思ふ位に一篇の乃至は一段の內容と詞のもつ滋味と、曲節としての音樂的生命を包含してゐるやにも思へる。

次に

〽殘る蕾の花一つ……

からは愈々曲としての閒然するところない味ひであるがここを何遍となくさらつてもらつて、未だ序の口から、こんなことでは前途洋々と云ふもおろか、稍々日暮れて道遠しの感を抱いて大抵はいや氣がさす所であらうと思

ふが、其處が我慢のしどころでもあらうかと縣命にくりかへすのである。

かくして

〃十八年がその間……

もなんなく突破して愈々全篇の壓卷とも云ふべき

〃夫の討死遊ばすを妻が知らいで何とせふ……

に出くはす。

そこで又たゝみかけて

〃二世も三世も女夫じやと思ふて居るに情ない……

とまるでサハリの連續の樣なものである。

この邊へ來ると大抵はダーである。

とにかく、筆者の「太十」練成日記はこんな具合でページを繰つて行くのであらうが、それにしても、空恐ろしい話といはねばなるまい。

ロッパや　小堀誠が「ガラマサドン」を芝居にしたことがあるが、その主人公の氣持は分るのである。たゞ筆者、ビール會社の社長でないのが遺憾なだけである。

○

筆者のお師匠といふのが、竹本梅太夫といふ老人である。

仲々酸いも甘いもかみわけた苦勞人で、年に似合はず若い聲の持ち主、そして、昨年物故された中村歌右衛門の聲色が上手で、阿古屋の畠山重忠などまさに、寸分のまがひもないといふ位に達者なもので、古川綠波の聲帶模寫はだしといふ代物である。

今では既に珍重ものといふべきだ。

聲帶模寫こと聲色もここまで似せてくると立派な藝術だと思ふ位に實に堂に入つてゐるので、其の至藝も一つつかみ度と考へたが、之は半ば生得的なもので、如何とも仕難い樣である。

然し、せめて、「太」の味だけは、そして其の、こつだけはつかめるのではないかと思つて、孜々として勉强これはげんでゐるが、日暮れて道遠しの樣な氣もしないではない。

尤も、義太夫は、極く短期の速成では駄目だといふ所に大に意味があるので、この義太夫の練習に日がかゝることそのことから、風紀の惡い一村が、すつかり原生の一路を辿つて、以前の博徒横行の樣な村の風習が一掃されてあそこにも此處にもデン黨が巾を利かすといふ非常時銃後の一美談が、この程紹介されてゐる。

それは鳥取縣八頭郡山七村といふ僻村であるが、健全娯樂が叫ばれ　それによる國民の厚生が眞面目にとり上げられてゐる時に、眞に國心にふれたそして板についた鄉土の藝術が着目されるといふことは頗るわが意を得た處といはねばならない。

國民文化が叫ばれると、擧つて西洋流のつけ燒刃的な輸入思想で塗り上げてみたり　又直譯的な外來の施設を其のまゝに鵜のみにするといつたことだけに汲々とする

運中の多い中に、茲に具眼の士があらはれて、國體の明徴、國民意識の節物、武士道思想の皷舞、義理人情の振作に力瘤を入れるとしたならば、之はまさに心ある爲政者以上の國士待遇をすべきであらう。

それにすぐ樣、デン黨とむすびつけるのもをかしいが其處にはなにがしの連契なしとは保しがたい。

筆者は淨瑠璃義太夫が持つ所の音樂的――なほいへば藝術的――な心望といふものをないがしろにするわけではないが、其の思想に於てすでに國心をうたひ、世道人心を誘掖教化してゐる點を强調したくなるのである。

更に、ここに引例した更生村に於てみる迄もなく、其の藝道修業の一路が、まさに鏤心彫骨、自ら人格昂揚の姿であり、切磋琢磨、粒々精進其のものであることにも大いに意義を見出すのである。

即ち、之を學的に基礎づけるならば、教音學に於ける形式的の陶冶と、實質的の陶冶をかねそなへてゐるともいへるのではあるまいか。

思想的な即ちイズムとして受ける感化の上に、事上錬磨の教化が加はつてゐるとしたらば、まさに鬼に金棒である。

最近、當局も識者も一つになつて騒いでゐる所の國民文化の問題の中で、特に國民の更生と、厚生をめざしての健全娯樂の實際的な施設經營は、單に思ひつきや、行き當りバツタリであつてはならないものである。

十分に、國民性を察知し、國民嗜好のおもむく所を鋭敏に捉へて、扨て其處に、當爲の國家理想を照射した上で、先づ思想國策を措定するていの用意が必要なのである。事は單に、義太夫のこと、藝能のこと、文化運動のことゝ高をくくつてゐたのではわざはひの牖々のうちにおこるを保し難い。國民の思想善導ほど難事中の難事なることゝ知らねばならぬ。

況や、其の思想をかりて　國民の厚生運動を起し、眞の意味の更生をはからんとすればなほ更である。

○

正月の芝居で、ロッパの「四十七分忠臣藏」に出語りをする太夫で思ひ出したことであるが、近頃、どうも義太夫熱が渤湃としておきてゐる樣な氣がしてならぬ。

さきに述べた樣な義太夫國策論とまでは行かないが、何處か、國策にでも沿つてゐるかの樣な錯覺にさへとらはれる。

それ程、大した意味に考へやつてゐないし、又見てゐないのに、こうしたものが、ふつつかの間に用ひられたり好まれたり、好評を博したりしてゐるとしたら、之れは何がなし、無意味の意味が含まれてゐると見なければならない。

何にしても、結論から見て結構のことである。

それに、矢張り一月、東劇の「小鍛冶」に道八以下が例の太のダイナミツクな、莊重なところをふんだんにき

かせてくれるので、僅かあの三本の線からかくも、逞ましい神々しさが生れるものかといふ之もいはぬ感に打たれるのである。

三すぢの糸の妙味！　之は義太夫の節調の人情をえぐる樣なサハリとは又別趣な時代と國境を超越した所の音樂的魅力を持つ樣である。

現に某日も、毛唐數人と共に猿之助の妙技に醉ひしれ乍ら、道八以下のあの入神の音色に恍惚として、無條件に、この紅毛人を參らせたことはむしろ痛快といひ度い位であつた。之は正月藝界の大きな收獲でもあつた。

最近讀んだ本の中で三宅周太郎氏の「續文樂研究」がある。

文部省推薦になつた「文樂研究」からみれば稍、雜莫といふ感じもないではないが相もかはらず、水もしたゝる樣な滋味をたゝへて、こよなくうれしい近頃での讀物たるを失はぬ。

戰時下、殊には、決戰否、必死の戰鬪體制下に、有閒らしい文學と笑はゞ笑へ。

ここにこそ、この超非常時をたゝかひぬき皇國を萬代不易のやすきにおく國民總意の結集があり、其の原動力が養はれ、不動の國心、不拔の我慢、破邪顯正の降魔の利劍にもひとしい力を包藏してゐる國粹藝術その名は義太夫淨瑠璃研究の好文字が羅列し、充滿してゐるものと解すべきである。

人、口を開けば國難來を叫び、慨世憂國をとなふ。

然し乍ら、それに對して、扨て餘ろの措置と善處と對策にいくばくの用意と覺悟ありやを思ふ時に、こうした一文獻の中にこそ、眞に日本的なものの昂揚をめざして魂の眞琴にふれ、いはずして懦夫をもふるひ起たしむるていの力を包藏してゐることに先づ氣づかねばなるまいと思ふ。

筆は常に劍よりも强しと古聖賢も喝破してゐる。

平和らしくみゆるものゝ中にこそ眞に恒久的愛國心が彌漫してゐるとみるべきである。

——市川眞閒の里にて——

ラジオ淨曲漫評

金　玉　丸

何年と續けて來た愚稿、漫評も大東亞戰爭に會ツちゃア叶はねえ、コ、姑らく中止、或は廢止にするの已むなきに至つた。その第一理由はラジオが聽き取りにくいからで、第二は甚だッマラヌものと永い間考へてゐた爲めである。

さらば〳〵

（一六・一二・二五）

新春偶語

紅雨莊主人

◇航空部隊の爆擊や、潛水艦の襲擊の、一發必中的神技には、外國はもとより、日本人自身が驚ろいてゐる。そして其原因は、武器の優秀な事や技術の卓拔して居る事は勿論であるが、精神力がそれをなさしめたのであるとせられる。誠に其通りであるが、これを具體的に云ふなら、爆擊や水雷發射は、日本では「技術」と云ふやうな淺いものでなく、已に「武道」の境地に達し、然かもそれが昔の劍術　槍術　馬術等に見るやうな、非常に高度な修練に達して居るものと云へる。勿論其飛行機を使驅し、潛航艦を飛はす場合の精神の緊張は、劍を構へ、槍を付け　馬に鞭を當てる時の心境であらうが、それ斗りで爲し得る事では無い。

◇數に於て利無き時、失望の代りに發奮して質と技で償ふ。支那人が鉈を大きくしたやうな青龍刀の大だんびらで、一薙に十人を叩き切らうと考へる時　日本人は三尺の秋水で百人を斬る工夫をする。西洋人が武器の性能や數量斗りを基礎に物を計畫する時、日本人は不足の武器で性能以上の仕事をし、足らぬは身體自身を武器にする無論其性能さへが世界に冠絶する迄刻苦精磨する事、古くは正宗以下の銘刀があり、近くは世界一の軍艦其他がある。どこの民族たつて或程度迄はさうだとは云へぬので　要するに肇國以來物の不自由といふ事實が根底にあり　そしてそこには赤道產の刺激の多い風に吹かれ、暖流の荒汐に洗はれる多血多感の民族が居るのでさうなるのである。同じ民族でも物質の饒多な無風常夏の南國ではさう行かず、常に氷雪と食物とに苦しんで猫のやうに縮まつてゐる寒國でもさう行かぬ。

◇そこでどういふ事が起るかと云ふと、目的　對照に對して、全人格、全生命を打ち込むといふ事になる。かくて生ずるのが「道」である。古來用ゐた言葉は何であらうと　要するに其事に命迄も打ち込んで了つて、武藝、武術は「武道」となり、繪畫でも彫刻でも面打ちでも茶でも華でも、何でもかでも「道」にせねば收まらず、それを「稽古」するとか「練習」するとかいふ境地を起えて「修業」するといふ所へ來るのである。もとより、「藝道」とても其通りであり、「藝道修業」の意味もそれに外ならぬ。ことにわが義太夫節の如きは、藝の司といはれただけあつて、其構成の復雜なる、其藝幅の廣さ、命

掛けの修業をし、老境に入つて始めて其全貌を味到するので、其間の極めて少數が、身自ら之を實現し得るのである。

◇私は、世の斯の道を職業とする人、此道に遊ぶ人、此道を聞いて樂む人、聞いて之を品隲する人が、深く之を心に置かるゝ事を希望する。そして「藝道深遠」の語の前に、先づ何よりも「謙讓」ならん事を希望する。何となれば　藝には奥があり、底無しであり、然かも現存の最高の藝を眞に理解する事すら容易でなく、理解したかに見えるのは上つ面であつたりするからである。

◇

◇淨瑠璃は語るものであるとか、いや、音曲だから唄ふ所もなくてはならぬとか、詞は語り地合は唄ふと考へてはならぬとか、寫實がよいとか惡いとか、こういふ種類の議論で昨年の論壇の一部が賑はつたかに記憶する。おれはこんな淨瑠璃が好きだといふ銘々の好みの話なら別とし、抑々淨瑠璃なるものはかくあらねばならぬといふ原則論だとすれば、何で今頃そんな基礎的な事が、淨瑠璃の評論でも書かうといふ程の人達の間で問題になるのかと思ふ。それとも私自身、自分が淨瑠璃が分つて居らぬ事に氣付かぬのであらうか。

◇竹田出雲の言葉に、「芝居も見物が新らしくなるので持てたもの」といふのがある。詰り見物の眼や耳は段々肥える一方で、始め感心した藝にもアラが見えて來、趣好も結局似たり寄つたりとなると見物が減るわけだが、次々に若い見物が補充されて、感激し陶醉してくれるので芝居も持てたものといふのである。淨瑠璃本質論が此意味のものなら誠に人意を强うするが、或は次のやうな事だと一寸困る。

◇例へばこゝに丹頂の鶴が一羽居る。或人は其頭を見て鶴は赤い鳥だと云ふ。次の人は其尻ポを見て鶴は黑い鳥だと云ふ。も一人の人は其胴體を見て、いや鶴はまつ白い鳥だと云ふ。更に第四の人が來て、諸君の云ふ事は皆違ふ　鶴は赤と黑と白とのブチであると云ふ。更に第五の人が來て細かに觀察し、鶴の特長は羽の色などではなく、人間とは反對に膝が後ろに曲がるのにあると云ふ。

◇旨い譬へのやうだが、これは何十年か前に讀んだ黑岩周六といふ人の「天人論」といふ當時の流行書の中に、自然主義を評する所に使つてあつた比喩を不思議に覺えてゐるので拜借して布衍したので、此頃著書などに相當名ある人から最近に聞いた斗りのよい話などを別に差支も無いのに名前を伏字にしたり、「某氏」などゝ故ら曖昧に――影を薄くして自分を前へ出さうとするやに見えるのがあつたり、昨夜あたり誰かに聞いたらしい事をさも昔から知つてゐたかのやうに威丈高になつて人に敎へやうとしたりするのなど見るやうだから、賞められぬうちに鬼才淚會外史に淵源する比喩なる事を斷つておく。

◇鶴は赤い鳥でも、黑い鳥でも、まつ白い鳥でも、ブチ

でも、脛坊主が逆に曲る鳥でもないのである。だと云つて赤い處が無いのでなく、黑い所も無いのでなく、白い所は無論澤山ある。然しそれにはそれ〴〵其所があり、其れ〴〵の分量がある筈で、三毛猫のやうなブチでは無いのである。又、曲る所は踵であつて膝では無く、踵なるものゝ曲るべきやうに後ろに曲るのであるが、同時に脚の眞中にあるので、膝が後ろへ曲るやうに「見える」のも事實であつて嘘では無い。

◇

◇「語る」と云ふ意味は一つでない。「文章の意味を表現する」といふ意味なら送りから段切まで全段「語る」のである。開合口捌きの問題から、全段寸分の隙もない演出態度、舞臺を戰場と心得る決死の腹構へに至るまで全段を「語り拔かう」とするものである。淨瑠璃は一段全體が語られてなくてはならぬ。全體が語られる時、見物の眼は輝き、情は激して、一時間半の一段を三十分位に感じ、もつと聞きたい、あゝ惜しいと思ふ。これを、「面白い」といふ。よく「よい淨瑠璃」と「面白い淨瑠璃」とを對立させて「面白い」といふ事を非難する人があるが、それは「面白い」に故ら自分勝手な意味を付けるからで、「悪い」淨瑠璃が「面白い」筈は無く、「糞面白くもないよい淨瑠璃」といふものも想像出來ぬ。「戀十」は大和風のノリ地を忘れてはどんなに巧者に語つても面白くはないのである。同時に寸法や足取りが如何に正しくとも、たゞそれだけで、聞いて感激が湧かねばよい淨瑠璃とは云へぬのである。此頃智識慾の自已滿足と、藝術上の感銘とを混同した義論が多い。

◇次に、全段を語る方法として、例へば講談なら言葉斗りだから其緩急メリハリで調子を取り、時には立て詞式の棒讀みを用ゐたりする。義太夫は其構成が復雜で、詞地合、フシ、又詞と地合との間に色々の程度のイロがあり、フシの外に歌、謠、其他の取り入れがある。詞と云つても向つて話すやうには云はぬので、芝居の科白に約束があるやうに、淨瑠璃の詞にも約束がある。それは、詞も音曲だといふ事で、結局淨瑠璃全體が音曲であり、さてこそ音曲の司なのである。此事實を忘れるから、義太夫が院本の文句の單なる聲音的表現のやうに考へたり或は極端な寫實に走るのをよいとしたりするのである。表現と云つても形式はどこ迄も音曲であり、寫實と云つても自ら限度がある。「八と熊とが喧嘩した」を語るのには「八」は八のやうに、「熊」は熊のやうに、そして其二人が「喧嘩」したやうに表現すべく、かゝる技巧の連續と其合計が一段の淨瑠璃だと考へたりするのは淨瑠璃といふ藝が分つて居らぬものであり、又前述のやうな前提無しに、單に抽象的に寫實がよいとか悪いとか論じて見ても、大凡意味の無い事である。

◇構成は右の通りとして、其取扱としては、或は唄ひ、或は語り、時に讀み、言ひ、話す。「唄ふ」と云ふ事を

悪い事のやうに云つたりするが、人間の感情が高調すれば　血行や呼吸の關係か、リズムが付いて　凝つて「詩」となり、發して「うた」となる。笑ひ聲や泣き聲が已に「うた」の一歩で、支那の泣女の泣聲は節になつて居る「唄ふ」のは面白い時斗りでは勿論無いので、悲しい時にも人間は唄ふのである。寺子屋のいろは送りを大掾は唄ひ、大隅は語つたといふ。どちらでもよいので。唄ふと云つても面白さうに唄ふのでは無い。若し「語る」故を以て大隅の行き方を大掾に勝るとすれば、それは淨瑠璃を知らぬといふもので、要は此場合どちらが妥當かと云ふ事になる。一般には散々語り拔いたあと、御臺所の出からさら〳〵運んでお客に一息つかしておいて、最後は十分唄つて堪能さすのをよいとし、お客もそれを喜んで「待つてました」と來る。古靱太夫がいろは送りをさら〳〵片付けるのは唄はぬのか唄へぬのか、賞める前に考へぬと贔負の引仆しになる。

◇次に、「語る」であるが、こゝで「語る」といふのは或言葉なり文句なりの持つ「情」（術語である）を十分に表現する技巧であつて、前の「語る」を廣い意味とすれば、狹い意味とも云へるであらう。「語る」のは詞と限らず、地合にもあり、フシにもあらうが、詞が最も語るに適しており、且つ奥底の無いものであり、人を感動せしめるのは多くは詞であり、從て詞のヘタな淨瑠璃などは困るといふ事になるが、例へば沼津の一子の可愛いといふ重荷は暫た間も休まぬ」の地合などは詞にするより旨く語れば深く人に迫る。併し忘れてならぬ事は、淨瑠璃は「語つて」斗り居るものでなく、前云ふ通り唄つたり、讀んだりしてゐる間で適當に「語る」のであつて此點どの藝でも變りは無く、芝居にも仕所があり、講談落語の類でも運ぶ所と聞かす所とがあり、畫でも小說でも、其他何でも、初めから終りまで語り通し、仕通し、聞かせ通し、描き通し、などゝいふものは無い。否、どこで語るか、どこを聞かすか、どこを書くかが藝の巧拙の分れる所である。一目で見る畫などは、先づ人の注意を集める重要な點を捉へ、それを十分表現して、次々に第二次第三次の所へ目の行くやうにする。耳で聞くものは時間がかゝるから、三分か五分ですむものは別とし、締めたり弛めたりせずして締め通しでは聞く方が草臥れて印象が弱くなり、ついで疲勞して興味を失ふ。「飽きぬやうに」と云ふ言葉を調子を下げてお客樣に迎合でもするかのやうに考へるのは此邊を考へぬからで、人間は生理的にさう出來ておるのである。畫で「煩さい」のを厭ふのも略ぼ之に似ておる。淨瑠璃に昔から使つて居る言葉は平易な日本語で、今日のやうに故ら特別の言葉を使つておらず、畫は「制作」せずとも「かく」でよいのである。淨瑠璃といふものを初めから終りまで語つて語つて語りつぶすものゝやうに思ふのは、義太夫節といふものゝ構成と其取扱に關するイロハを知らぬものと云へ

る。

◇茲に於て所謂インテリの長所短所がはつきり分り、われ〳〵老インテリも大に自戒せねばならぬ。學問とは或事柄に關する整頓せられたる智識といふ事で、學校では其整頓せられて行儀よく並べられた高低區々の智識の頭を一通り撫でさせる。撫でるのは頭斗りで、且下の方にある頭は手にも觸れぬ。氣の早いのはそれで何もかも知つたと思ふが、實は其程度に過ぎぬので、たゞ早く鳥瞰を摑むといふ事は出來るやうになり、且つ頭が精緻になるから、撫でた智識の頭を更に下の方へ捜り下ろす事も出來る。これがインテリの特長であつて、從て何か新らしい事に興味を持つとすぐ「鳥瞰圖」を作り、「原則」を求め、人の十年掛つた事を一年で知らうとし、そして知つたやうな氣持になる。然かし、物の煮えるのには時間が掛り、物の熟するのには日を要する。藝術を見る目藝を聞く耳は亦別のものと見え、畫書きの癖に畫の分らぬのや、何十年も聞いて藝の分らぬのが有り得る事になる。分るといふのは智識や皮肉や通をふり廻し、其規格に合ふか合はぬかを詮索するのを樂しみにするといふ意味では無く、よい藝術、よい藝に接して感動する感受性の鋭敏なのを云ひ、智識は原則として感動に基礎を與へて有意であるが、智識から歸納したのは屁理窟になり易く、藝術を解する正道でないから往々にして有害である

◇

◇こゝ迄書くと、も少し書かねば十分意味が通じないやうな氣持がする。

◇前に、語る斗りが能ではないといふやうな意味の事を云つたが、それは人の生理の當然といふたけれども、それだけでなく、も一つ奥がある。

◇例へばこゝに壺が一つある。壺は普通に壺として知らるゝ形の陶器であるとする。即ち其陶器自身が壺なのである。中は無論空洞である。然かし空洞は虚無では無い正式に云へば、中に空洞が「有る」のである。空洞が無くては壺は成立たぬ。即ち、壺は陶器の外郭と、それによつて圍まるゝ空洞とによつて出來て居る。陶器を壺の陽性と云ひ、空洞を壺の陰性と云つてもよい。即ち壺は陰陽で出來上つて居る。

◇人の陰陽も亦似て居る。成り〳〵て餘れる所が陽で、成り〳〵て足らざる所が陰なる事は古事記にもある通りだが、陰は虚無、欠缺ではない。つまり、突き出て居るのが男であつて、引込んで居るのが女であり、男にあつて女に無いのと違ふ。男に有つて女に無いといふなら、女に有つて男に無いとも云へる。

◇以上は手製の陰陽論で、間違つてゐたら御免を蒙る。

◇今頃陰陽などゝ云ふと紅雨居士も老い込んだと思ふ人もあらうが、陰陽の理は東洋の學問の根底であり、今頃やつとこんな事に注意が向いた迂濶さを後悔して居る。電氣が陰陽の見本であるのは申す迄もなく、物質が結局

電氣の渦巻とすれば、三千世界は陰と陽との交流世界と云へる。爆彈は陰であり、爆發は陽であり、などゝ云ひ初めると切りが無い。要するに陰陽の思想は東洋哲學の中樞であり、東洋の學問の基礎であると云へるらしい。

◇之を藝術に見るに、例へば日本畫に「餘白」といふものがある。私は團扇の畫のやうな美人畫や、着物の新柄のやうな新人の畫を珍重する者ではないが、よい畫には必ず餘白が物を言つてゐるやうに思ふ。餘白は虚無ではないので、畫面の「陰」の部分である。餘白の陰が、描いた部分の陽と持ち合ひ、陽を引き立てゝ、こゝに一幅の畫が出來上る。氣韻生動などゝ云ふのは、この陰と陽との境目から生ずる畫の動きを云ふのであらう。

◇西洋の畫はさうでは無く、モザイクか刺繍のやうに塗りつぶし描きつぶす。其結果畫面に明暗の陰陽を付け、此頃では畫の具を撥き取つたり盛り上げたりして調子をつける。私は故滿谷國四郎氏の畫室を訪ねた時、描きかけの畫を見たが、それは平野に大きな樹があり、青空で下に裸婦の居る畫であつたが、「樹の葉と空との境が六かしくて」と笑ひ乍ら話すのを、變な所が六かしいものだ位るに聞いて居たが、今にして思へば、氏の畫風としては「餘白」の無い油畫に所謂氣韻生動を求むる事の氏の技倆を以てしてさへ如何に困難な事であるかに思ひ當るので　矢張り大家だけある、偉いもんだと今頃になつて感心して居る。

◇私は洋畫家の日本畫といふのが厭ひである。それは形ばかり先に付き過ぎて、內容が伴はぬからである。劇評家の文樂評も往々之に近い。然し私の最も好み且つ尊敬する滿谷氏のを見てさへ、どうも今一息パッとせぬ。私は最近或所で二三の此種の作を見たが、稍重とか滿谷とか、好きな人斗りであつた。何故これだけの畫書きのものがピンと來ぬかと煩惱の末、フト「餘白の研究が足らぬ」と思つた。「描く」だけでは日本畫にならぬので、「描かぬ」部分が勘定に這入るから、何となく餘技めいて見え、素人らしく見え、しつくりせぬのであらう。

◇これだけ書けば私が淨瑠璃について何を云はんとするかが分つて頂けると思ふ。語らぬ部分は語り足らぬのではなくて、陰を以て語る部分の陽を引立てる、日本藝術獨得の狙ひ方なのである。外國にもそれがあるならそれでもよし。要するに全面語りつぶすべきものではないのである。

◇「陰を以て陽を引立てる」と云つたが、も一つ奥へ進まねばならぬ。畫の「描いた」部分は陽であつて「現實の世界」、「描かぬ」部分は陰であつて「想像の世界」、よい畫は觀る人を「限り有る現實の世界」から「限りも無い想像の廣い世界」へ引入れる。有るが儘に表現して見せるだけなら「藝當」か「職人仕事」である。觀る人を想像の世界へ引入れて、羽化登仙させてこそ初めて、「藝」であり「藝術」であり、藝有り藝術有りが存在す

る理由、尊敬される理由も亦こゝにある。墨を惜む事金を惜むが如しなどゝ云つて賞めるのも、その描かぬ事が觀者を狹い現實の世界から廣大無邊の想像の世界に導くに效あるからである。「語らぬ」部分は「語る」部分を引立てる斗りでは無い。「唄つて」ゐる間に聽手は想像の世界に引入れられるのである。其「語る」部分でさへも、本當に效力を發揮するのは言葉と言葉との間の、何も云はぬ間にある事は誰れでも知つて居る。人形の面白いのは人を現實から引離すからで、此意味に於て明る過ぎる照明や、寫實過ぎる舞臺裝置が有害なのである。唄ふものだとか語るものだとか偏奇な議論の起るのは天分の足らぬ片輪藝を槪準に物を考へるからで、淨瑠璃は其人達の考へて居るよりもつと〳〵結構なものであるべき筈である。それだから「藝術」であり「藝の司」なのである。

◇

◇以上云つたやうな風に淨瑠璃を語る人は、何十年かに一人しか出ないであらう。然かし出たら淨瑠璃は必ず復興する。若し古典其儘で受けぬなら、さう云ふ天才は必ず新流を創め、初代義太夫が「當流」を以て世に立つたやうに、吾々の一寸想像の付かぬ形にして世に問ふであらう。ことに「新作」に於て之を試るであらう。然かし人の天分は多くは偏して居るから唄へる人は語れず、語れる人は唄へぬと云ふやうな事になり、且つ人の集まるのは物質上の報酬と關聯するから、將來ともどの邊迄期待出來るか疑はしい。淨瑠璃は多趣多彩、色々有るのがよいと私のいつかも云つたのは、どうせそんな名人は出るものでなく、出ても一人では興行にならぬから、現實の問題としては、一座寄せ集めて、文樂全體として、少しでも旨い會席料理をお客に食はせろといふ意味で、此點別段の理想論は理想論として、考へに變りは無い。

（一七、一、一三）

御禮

東京第一陸軍病院　太棹第百三十七號　五拾冊

東京第三陸軍病院　同　三　十　冊

寄贈　白井清華氏

右弊社の趣旨に贊同せられ傷病將士慰安として御寄贈披下候段奉深謝候

太棹社

文樂屋圖譜

宮尾しげを

片手遣

普通人形は三人遣ひ、ツメ人形は一人遣ひ、弓手ものである御祝儀三番叟が二人遣ひと成つてゐるが、三人遣ひである人形が二人遣ひになる事がある、そのよく現はれたのは、人形が役の上で縛られた時の事である、縛られてゐるので左手遣ひは不要となり、主遣ひと　足遣ひになる。この際の主遣ひも右手は人形の袂の中へ入れる必要もないので、自分の袴の切れ口へ挿し入れる。これを文樂では片手遣ひと云ふ。この片手遣ひの例は、女形の人形の裏向きになつた時にも見られる。近頃この女形の後姿の線の美しさに拍手が湧くので一芝居の中で二度も三度も見せる人形遣ひがあるが、これは邪道であるので訂正して貰ひたいものである。

白茅亭雑記

富取芳河士

弟の死

去年の暮も押しつまつた頃から持ち上つた甥の結婚話がどん〳〵運んで、一月廿三日飯田町の大神宮で式を擧げた。此の式に大阪から遙々東上して出席した弟双鹿が運命とは言へ、式日の翌日から猛熱して肺炎に化し二月九日遂に死んでしまつた。大阪から東京へ死にゝ出たやうなものだが、これが運命といふものであらう。しかし東京であつたればこそ兄弟一同に見護られて死んだのでせめても仕合せだ。と伽をした皆が靈を慰めたのであつた。

私の名が壽鹿で、弟は次に產れたので双鹿と名づけられ、父は弟を京都へ出して瀬戸物屋にするつもりであつたが、本人は嫌つて東京へ出て關口一也氏の門に入り彫刻に志し、後青木美水氏を師として號を美盛と名乘つた。震災の時に獨り大阪へ赴き、帝都のやうな火災の起らなかつた大阪だけに間もなく自活の途を開いて今日に及んだのである。

兄弟からは變人だと言はれたが、それほどでもなかつたやうだ。コツ〳〵毎日小刀を取つて、時には釣に出掛けたり、鶯や鈴虫の子飼ひをして唯一の樂しみとしてゐた。

「兄さん　大阪へ一度來て下さい、琵琶湖へ案内しやう、竹生島も廻らう」と言つてゐたので、是非一度行きたいと思つてゐると、丁度、九重會が組織されて大阪の八千代會と合同して交互に京阪で開催するといふ事になつたので、これ幸ひ一度隨行して後でゆつくり弟に案内させやうと思ひ乍ら、一昨年も昨年も其度毎に神經痛やら何かの都合で行けなくなつた。昨秋などは買はれぬ中を隨分骨を折つて「これだけあつたら兄貴も充分だらう」と相當酒を買ひ溜めて待つてくれたさうだ。

去年の夏兄弟一同が出し合つて鄕里の墓碑を建てなほして父の十七回忌を營み、此時六人の兄弟が集まつたので、こんなことは珍らしいから寫眞を取らうと言ひ出したのが双鹿であつた立派なお墓になつたなア、誰が一番先きに入るのかなどゝ言つたのも双鹿であつた。

俄かに寫眞師を呼んで住職を始め我等兄弟、或は夫、或は妻外に昔の出入の者など三十人程が相立ち、相屈み、信濃川を前にして寺の土手で撮影した、その眞ん中に「斯うして、みんなに逢ふのは三十年振りだ、生きてゐると揃つて、みんなに逢へる」と、双鹿はうれしさうに立つた。それから半年後の今日、最早亡し、一番先に墓へ入ることになつた。

矢張り變人であつたのかも知れないが、七年前に漸く妻を持て「昨年十幾年振りで新妻共々上京して十日餘り滯在したのであるが、妻は久子と言つて實に賢にして良、「双鹿さんは良い女房を持つた」と忽ち兄弟間の話題となつた。弟もこれからだと大に期待してゐたのであるが、一朝病魔の爲めに仆る、現滅人界の常にして、老幼夭壽の別なしとは言へ、未だその功も見ずして前途暗憺たるうちに瞑目した弟の胸裡を考察して斷腸暗涙に咽び、亦復らぬ幽魂の瞑福を祈りつゝ三七日の夜此の稿をつゞる。（三月一日夜）

太棹社彙報

本欄は大會又は新生の會を報道致します。開催前月に詳報したるものは開催後の記事を略します。時種の催ほしの外前書きを略します。番組御送付なきもの、或は御通信なき會は記載洩れとなります。御諒承を乞ふ。

（太　棹　社）

小田原御幸座に於ける
東京睦會義太夫大會

豐澤和孝連を以て組織されてゐる睦會は昨秋同所にて開演非常な好評を博したが、二月十九、廿日の兩日午後四時半より銃後慰安藝能報國としてその第二回を再び同座に於て賑々しく開催し、今回は和出春和、大用大嘉津、中村白猿の三氏が應援出演の外小田原素義界の有志後藤光仙琴榮氏が二日間の序口を承りて熱演の外例に依り同地方の重鎭堀内可笑氏を始め大磯等の愛義家諸氏の聲援があつて頗る盛況を極めた。

（初日）太十（光仙、和孝）酒屋（白猿、猿藏）新口（竹糸、阿生駒）合邦前（中次、和孝）鮨屋（義昌、龜造）帶屋（春和、和孝）…（二日目）野崎（榮、和孝）合邦奥（中次和孝）松王邸（白猿、猿藏）本下（大嘉津、猿藏）朝顏（竹糸、阿生駒）志渡寺（義昌、和孝）

戰捷記念『中老會』大會

淨曲中老會は沼井盛鶴、原田越巴坂本あるを、淺田奇聲、松岡茂里雄緒方千晴、井上巽、木下松玉、高瀨操、和田春和の十氏に依つて組織され、並木倶樂部を本城として例會の都度盛會裡に會員諸氏の熱演を以て好評を博してゐたが、最近水野昇、田中呑笑氏の入會に次ぎ星野桔梗、廣瀨いろは、三並義昌氏の入會があり益々會の隆盛を見るに至り、今回戰捷記念として五月五日正午より並木倶樂部に於て春季大會を開催し、帝都素義界に未だ曾て見ざる忠臣藏大序より十二段目兩國橋引上げまで全通しを全部掛合にて上演する事になつた。なほ都合上あるを、茂里雄巽の三氏が休演する事になつたのでこれに代つて木村一司、久米中次、川口子太郎、高橋東好の諸氏が應援として出演、目下猛稽古中で、當日の番組は文樂風とし、星野桔梗氏が得意の筆を揮つて作製中である。なほ同會は今後年二三回位新らしき企てを催ほすとの事であるが、流石全

會員意氣投合の中老會の事として大に期待されてゐる。當日の掛合番組左の通り。

忠臣藏全通し＝大序（直義、中次師直　桔梗。若狹之助　義昌。顏世子太郎。判官、一司。和孝）三段目殿中（師直、盛鶴。判官、春和。若狹之助、桔梗。本藏、呑笑。絃內）裏門（勘平、中次。お輕、子太郎。伴內、義昌。龜造）四段目、判官切腹（判官、いろは。石堂、奇聲。藥師寺、越巴。顏世、千晴。鄕右衛門呑笑。力彌、子太郎。九太夫、桔梗由良之助、春和。團市）五段目、二ツ玉（定九郎、越巴。與市兵衛、奇聲。勘平、東好。和歌吉）六段目、身賣（勘平、一司。母、桔梗。お輕操。一文字屋、春和。綱助）勘平切腹（勘平、越巴。母、操。鄕右衛門奇聲。彌五郎、盛鶴。狩人、東好。道之助）七段目、一力茶屋（由良之助、呑笑。重太郎、春和。彌五郎、義昌。喜多八、越巴。仲居、中次。お輕、松上。亭主、いろは。力彌、子太郎。九太夫、桔梗。伴內、盛鶴平右衛門、千晴。絃平）九段目　山科閑居（戶無瀨、操。小浪、義昌。由良之助、春和。力彌、子太郎。おりん、千晴。お石、昇。本藏、桔梗猿平）十二段目、兩國橋引上（由良之助、春和。鄕右衛門　奇聲。力彌子太郎。喜多八、越巴。彌五郎、義昌。源吾、一司。與茂七、中次。平右衛門、千晴。和孝）

浄曲

梅鉢會の誕生

『凡そ家の紋は先祖代々幾星霜の長きにわたつて變ることなく傳承して來たもので現在は別れ別れでも各々逆つて由來を辿れば其元は一つでありませう。東京の素義數ある中に同じ梅鉢の紋を受繼いで來た者達は、みな先祖を同じくする血族であらうと思はれます。その遙か昔の家族愛を淨瑠璃を通じて覺醒したい……さうした心持でこの會が天神樣の御照覽の前で誓はれ結ばれました。紅梅白梅の色とり〳〵でも香は同じ淨瑠璃の、梅鉢會の兄弟姉妹達に御厚誼の御聲援を御願ひ申上ます』といふ發會の挨拶だけでも和氣靄々として祖先代々梅鉢の紋を受け繼ぐ人々によつて淨曲「梅鉢會」が組織され、天神忌の二月廿五日正午より淺草並木倶樂部に於て第一回を開催した。發會に先きだち前日會員二十餘名龜戶天神に參拜したが恰も當日は降雪皚々、雪は菅公に緣りある事として此日の祈願に應しく一同寒さを忘れて大喜び、龜戶天神の由來など神官より聞きつゝ神酒を頂戴したとの事である。なほ同會は會長に黑川叶氏を推し、安藤都昇、淺井蝶花、川口子太郎　岡田彌聲、乾桔梗、山田義昇の諸氏が幹事に就任、事務所を向島黑川叶氏方に設け、年三回二、六、

十の月の廿五日並木倶樂部に開催することになつた。第一回の番組左の通り。

車引（時平公、桔梗。松王、蝶花梅王、子太郎。櫻丸　扇華。杉王、叶壽夫。絃　龜造）松王邸（叶、扇之助）酒屋（神風、道之助）寺子屋（吉樂、鶴助）忠六（都平、都太夫）天拜山（子太郎、和孝）太十（豊國道之助）八百屋（扇華　扇之助）引窓（春和、絃平）安達（都昇、都太夫）壺坂（都雀、巴丈）聚樂町（桔梗、龜造）東天紅（蝶花、勝助）忠九（義昇、龜造）佐太村（彌聲、扇之助）合邦（雅樂、勝助）大切、寺子屋（松王、義昇。源藏、叶。玄蕃蝶花。千代、桔梗。戸浪、子太郎。百姓、梅の子。絃、猿藏）

義太夫靜淨會

靜岡縣へを以て昨年組織された淨曲「靜淨會」はその第二回を二月四日正午より並木倶樂部に開催。

三代記（翠鳳、綾秀）辨慶（紀鳳綾秀）陣屋（靜矢、猿吉知）壺坂（淺路　佳照）安達（愛壽、綾秀）御所三（勝嗣、越嗣）合邦（喜城、猿吉知）、太十（未成、綱助）沼津（蝶花、勝助）白石（綾登、綾秀）佐出村（喜春、猿吉知）太十（司光綾秀）鳴門（蟻若、清司）布四（清水、聲保、綱助）先代　治光、綾秀）鮨屋（痴樂、團八）朝顔（市菊、福彌）城木屋（清水、安樂、綱助）蝶八（壽鳳　綾秀）四谷（靜翠、和孝）寺子屋（竹矢、清吉）忠九（桔梗、綱助）今回の欠演者は淺本竹始　酒井龍司　川口子太郎、鈴木うろこ、杉本薫秋、高部自笑　佐對美昇　富田壽　建松愛壽、井口明子、大山絃醉、八木及昇、關對柳鳳、加藤壽松、山本梅笑の諸氏。

長生會

生る

「不老長生」の著者中川愛氷氏は同好の士と語らひ「淨曲長生會」を組織、その第一回を二月廿七日正午より上野松坂屋ホールに於て開催。七十一の喜壽を保ち、しかも五十を捨てゝ二十一歳に若返るといふ主宰中川愛氷氏を始め、昨夏チブスにて入院して三度びも無情の風に誘はれかけて九死に一生を得た乃村乃菊氏など大に長生の意氣を示し、其他會員諸賢は淨瑠璃で大に心臓を強めていよ〳〵不老長生の體育實踐を擧げやうといふ事である。

柳（佳津子、佳照）先代（以與子良造）十種香（愛氷、佳照）紙治（六花、清一）陣屋（義昇、龜造）吃久（乃菊、佳照）堀川（山生、鹿重。ツレ、桃子）なほ次回は四月廿七日正午後より同ホールにて開催。鮨屋（佳津子、佳照）太十（六花、清一）引窓（乃菊、佳照）組打（愛

氷、佳照）寺子屋（山生、鹿重）十種香（以與子、良造）佐太村（義昇龜造）以上順次不同。

第二回 鸚鵡會

昨年築地國民劇場にて第一聲を擧げた鸚鵡會は今回日本橋倶樂部に進出その第二回を三月二日午後四時半より左記番組のもとに華々しく開演した。

壺坂（昇登、綱助）中將姫（大阪春華、清芳）質店（染登、猿幸）引窓（土佐廣、綱助）鮨屋（大阪、小仙）華玉。九太夫、白水。郷右衛門、榮枝。力彌、うろこ。顔世御前、あさひ。由良之助、万華）忠六（勘平、津玉。郷右衛門、三升。彌五郎、うろこ。母、璃松）忠七（由良之助、白水。力彌、うろこ。九太夫、翠香伴內、万華。重太郎、三升。彌五郎榮枝。喜多八、華玉。亭主、津玉。仲居、旭晴。禮子。おかる、橘。平右衛門、あさひ）絃（旭勝、旭晴）

大連 旭勝會

大連旭勝會は二月廿二日午後一時より田村橘氏の見臺披露を兼ねて春季淨瑠璃會を淡月樓上に於て開催。日吉（義昇）組打（白翁）十種香（旭登）柳（湖東）・新口（橘）忠四（判宮、翠香。石堂、津玉。藥師寺

東都 女義後援會

東都女義後援會は時節柄當分晝間開演とし一月廿八日並木倶樂部にて第廿四回を開演。

鈴ヶ森（駒榮、佐世子）圓覺寺（佳世子、三勝）寺子屋（小和光、清三）野崎（駒龍、津賀昇）中將姫（小津賀、紋敎）沼津（佳仙、清二）安達（佳照、清一）鰻谷（猿春、三生）五斗（團蝶、猿幸）：第廿五回二月廿八日：舟別（駒榮、佳世子）先代（佳世子、三勝）白石（三勝、清二）蝶八（住若、清一）太十（素八、播磨一）長局（彌周、三生）鮨屋（昇登、綱助）合邦（猿清、駒登久）十種香（越駒、紋敎）

綱造會

目下在京指導中の鶴澤綱造氏の爲め三月十八日雷門並木倶樂部に於て「綱造會」を開催する事になつた。

壺坂 掛合（土佐廣、昇登、猿三郎、綱助）瀧（雅樂）鮨屋（隅斗）竹中砦（子太郎）河漕（潮）河庄（三鳳）志渡寺（義昌）忠九前（紅司）同奥（桔梗）絃（綱造）

故竹本綾之助 追善義太夫會

一月卅一日永眠した初代竹本綾之

助の一門會に依り三月五日正午より茅場町宮松亭にて追善義太夫會が催ほされ、應援として左記番組の如く多數の素義出演もあり頗る盛會を極めた。

寺子屋（綾千代）鮨屋（綾春）壺坂（綾枝）太十（綾絹）酒屋（綾香）岸姫（佳照）鳴門（綾照）以上三味線（猿玉、綾秀、綾柳、綾女、清一）……吃又（乃菊）十種香狐火（愛氷）辨慶（庄藏）新口（光玉）以上絃（佳照）辨慶（福登久、綾千代）長局（壽瓢、綾秀）彌作（悟鈴　絃平）壺坂（花玉、綾柳）十種香（兒玉　綾女）日吉（和樂　佳照）寺子屋（綾德　綾柳）大原幽學（蝶花形、勝八）大切新曲富士卷狩（忠常　綾春。糸姫、綾千代。十郎　綾清。五郎、綾枝）絃（猿玉。ツレ、綾秀、綾柳。琴　綾女）

竹本佳照二代目竹本綾之助を襲名

今から十三四年前二代目竹本綾之助を繼いだが、何かの都合でその名を返し竹本柳子と名乘り、間もなく佳照と改名して今に至つた東都女義界の覇王竹本佳照は今度二代目綾之助を襲名して近日その披露大會を開く事になつた。師は鳥取縣の出身、初め鳥取の豊澤新次郎に就き次いで大阪に出で豊澤龍助に師事し、同地「金菊」に播重と名乘つて出演してゐたが、明治卅五年上京「宮松」で看板をあげ、一月故人となつた初代綾之助に就て練磨修得するところあり、二代綾之助を繼いで間もなくその名を返し竹本柳子と名乘り、次いで佳照と改名して十三年、佳照會を主宰して今日に及ぶ。

日本因協會

大阪日本因會は太夫、三味線、人形の三業一體となり日本因協會と改稱した事は既報の通りであるが、一月廿五日午前十一時より文樂座に於て盛大な結成式が擧げられた。

襲名

◇野澤喜代之助　五代野澤吉三郎を襲名。師は大正六年七代野澤喜八郎の門に入り、その歿後現野澤吉兵衛の預りとなり喜代之助と名乘り、文樂座二月興行にて五代野澤吉三郎を襲ふ。

◇鶴澤叶　二代鶴澤清八を襲名。師は明治廿三年五月、二代目鶴澤清六の門人として文樂座に入座二代鶴澤鶴五郎と名乘る。後明治卅二年一月、四代目鶴太郎と改名。大正二年正月更に四代目叶となりて今日に及ぶ、文樂座三月興行にて二代

鶴澤清八を襲ふ。

◇吉田文作　三代目桐竹龜松を襲ふ。約廿年吉田文五郎の門人として文作を名乘る。支那事變勃發と同時に出征、赫々たる武勳を樹てゝ十五年五月歸還、以後藝道に精進中二月興行文樂座にて三代桐竹龜松となる。

當座帖

▽川口子太郎氏　芝區琴平町三二番地へ轉居。
▽的野關路氏　七里ケ濱にて病氣靜養中。
▽原田越巴氏　十喜和會へ入會。
▽橋本喜雀氏　同　上。
▽乾　桔梗氏　同　上。
▽高瀨　操氏　二月上旬滿洲へ。
▽河野國聲氏　二月中旬同上。
▽鈴木松寶氏　再び慶應へ入院中の同氏は最近退院自宅にて治療中。
▽高光吳光氏　本所區請地一八二番地へ轉居。
▽星野桔梗氏　中老會へ入會。
▽廣瀨いろは氏　同　上。
▽三並義昇氏　同　上。
▽後藤楓江氏　京城府黑石町明水臺竹通八番地へ轉居。

▽鶴澤觀西翁師　日に增し經過良好
▽竹本濱太夫　應召中の竹本濱太夫師留守宅は北區老松町三丁目六二番地へ移轉。
▽豐竹古靱太夫　西區北堀江通三丁目六番地へ轉居。電話新町五八八五番。

寄贈新刊

▼**不老長生**　（中川愛氷氏著）中川愛氷氏は昨年「三絃樂史」の大著作を成し、今又「不老長生」を執筆喜壽にしてその元氣旺盛は靑年をしのぐものあり、本書は永年體驗せられた不老長生法である。（非賣品）

◇天橋圖書館第參拾貳回年報◇趣味の友◇白塔◇老人五句集◇みどり◇サンデウ◇田庭は流る◇千里◇淨瑠璃月報◇淨曲新報◇文樂藝術◇淨瑠璃雜誌◇淨曲研究◇大日本淨瑠璃雜誌◇大阪文樂座如月興行人形淨瑠璃◇東京女義太夫若手人氣番附

▽竹本素八會　三月十六日午前五時より飛行會館にて。
▽因會男子部　四月十日午後一時より並木倶樂部にて。
▽古典研究會　五月二日並木倶樂部にて。

出版豫定

文樂かしらの研究　豐竹古靱太夫序、齋藤清二郎氏著「文樂かしらの研究」は東京アトリス社より三月中刊行の豫定。

正誤

前號掲載「義松會」の豐澤松一郎は豐澤松四郎の誤植につき訂正。松四郎氏に謝す。

會報

消息

▼的野關路氏より　昨秋より健康を害し當所に入院精養中です。昨今非常に元氣恢復三月中旬頃退院の豫定です。朝夕七里ケ濱の波の音を聞き乍ら口の中で淨瑠璃を語つて居ります。（七里ケ濱膳越惠風園内的野關路）

▼三好會より　昨年三好會連中津滿子孃吹込の「柳」は十一月菊川倶樂部三好會にて抽籤を以て贈呈したが、其後多數の復寫レコードを三好母校岐阜縣菅田町國民學校を始め在郷中三好會員の諸賢へ贈り昔の思ひを新たにせり。なほ一月卅一日は十七年度最初の催ほしとして菊川倶樂部に開演。廿四孝（のし子）寺子屋（津滿子）柳（巴好）太十（時昇）紘（玉子、三好）なほ次回は三月廿八日相互倶樂部に開演。（森三好）

▼竹澤一座より　御社益々御隆盛大慶に御座候私共一行お蔭様にて大好評日延べ〳〵にて當仙臺には三月卅日迄身振劇にて續演する事と相成り申候目下太夫は竹本綱枝、竹本駒若、竹澤龍吉に有之女優は龍壽美龍喜代、龍多摩、龍若、龍春、龍志ん、龍丸、龍三郎外五名に候（竹澤龜次郎）

▼保良鈴鳳氏の献金　籠寅商店興行部では所屬俳優及び從業全員が一ケ月の收入のうち一日分を軍用機建造費として献金する事を企て、籠寅報國會軍用機繼續献金の第一回として金一萬圓を店主保良淺之助（鈴鳳）氏は當局へ出頭献金の手續きをとつた。

▼東都聲義會　東都聲義會は改組第一回を一月廿三日午後四時より相互倶樂に於て開催。日吉（翠瓢、綾秀）太十（冠之、勝助）酒屋（ひばり、紘平）安達（里芳、勝助）山名屋（ときわ、素女若）瀧（叶、龜造）揚屋（和鳳、染登）（英、染登）先代（壽瓢、綾秀）

▼十喜和會　二月廿六日夜相互倶樂部にて開催。酒屋（お園、素鳳。半兵衛、玉鳳。宗岸、彌生。母、あるを）紘（彌之助）岸姫（素鳳）柳（玉鳳）長局（越巴）忠九（義昇）中將姫（平茶）沼津（淡路）八陣（彌生）河庄（あるを）紙治（桔梗）先代（山生）紘（廣助）なほ豊澤廣助師は閉會後直ちに歸阪。

▼素玄淨曲研究會　素玄淨曲研究會第四十二回は二月廿七日午後六時より牛込相互倶樂部に開催。瀧（雅樂　綱助）陣屋（福登久、綾千代）新口（紫蝶、仙玉）無間鐘（小津賀、紋教）なほ四十二回は三月廿七日錦橋閣にて開催、出演者は妙心寺（三玉）阿漕（若狸）太十（東朝仙玉）

▼京城素義聯合協會　京城素義聯合協會にては定期役員改選の結果會長に後藤楓江、幹事長田中南北、會計末積扇昇、交渉係竹濃下美雀、

文書係宮崎古泉、設備係平島清次郎の諸氏が就任。

▼**女義若女會**　東橋亭にて開演の女義若女會第卅九は二月一日。鈴ヶ森（駒榮、素一）忠六（素次、素八）先代（小津賀、紋敎）朝顏（素八、播磨一）太十（越駒、紋敎）……第四十回二月十五日。太十（駒榮、素一）柳（素次、素八）新口（文昇）鮨屋（素八、播磨一）野崎（素昇、猿幸）……第四十一回三月一日。辨慶（津賀重）二度目（素次、素八）十種香（小津賀、紋敎）酒屋（素八播磨一）陣屋（重子、勝八）

▼**豐竹古靭太夫の献金**　一月檜下を襲つた豐竹古靭太夫は陸海軍へ各壹千圓、大阪府市出征傷兵援護會へ各五百圓、日本赤十字社へ五百圓日本因協會へ五百圓合計金四千圓を献納寄附した。

▼**中居謙治郎君**　床世話中居謙治郎君は、何時出征するやも知れぬ今の身の上を考慮、目下吉原の上州屋を買收して家族の安定を圖り、傍ら義太夫世話方として眞面目に精勤してゐる。

訃報

松林福笑氏　本誌名譽會員松林福笑氏は一月十八日發病、狹心症にて遂に廿日急逝、廿二日自宅にて告別式を執行、享年六十六。氏は三重縣の出身。淨瑠璃は大阪の鶴澤廣榮、同玉助、同大糸（後の燕四）東京の豐澤團左衛門、同團八等に師事し、修得年限四十二年に及び、世話物を得意として東都素義界の重鎭であつた。

竹本綾之助師　一月卅一日午後十一時十分心臟病にて逝去。二月三日午後一時より二時迄世田谷區松原町の自宅にて告別式を執行、享年六十八。綾之助は本名石井ソノ、明治八年八月生れ初代竹本綾瀨太夫初代竹本東玉に師事、十二歳にして既に眞打ちとなり、臺聽の光榮に浴し、明治年間その美聲と艶姿は一生を風靡し寄席の興行日數を十五日制に改めた等功勞も尠なくなかつた。

迅速と廉價は
弊店の特色

花

下谷區南稻荷町四
坂田フロリスタ
電話下谷六一八一番

本誌後援名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

廣瀬いろは氏　水戸部いづみ氏　木村一一　鈴木信司氏　高泉昇氏　荒木子氏　關口以與補氏　吉井浪子氏　櫻呂氏　阿部光氏　橋一氏　菅崔氏　中笑氏　田本喜氏　村梅氏　田白春氏　和島北氏　和田斗氏　北村猿氏　佐藤平之助氏　中澤巴氏　安藤どくろ氏　安登氏　小山盛氏　吉田氏　川竹氏　藤昇氏　藤平氏　安都氏　安都氏　安都氏　安都氏　平都氏　野都氏　大熊氏

國友氏　高橋氏　保々氏　緒方氏　栗原氏　久米氏　岸本氏　松馬氏　神本氏　岡柳氏　林里氏　金林氏　本松氏　鈴木氏　林木氏　青山氏　飛石かな氏　加藤氏　高橋可氏　西田可氏　黒川氏　米澤氏　岩崎がん氏　大用大嘉津氏

東東氏　長千氏　千中氏　竹千氏　鳥史氏　芳次氏　光鶴氏　昇晴氏　松平氏　岸好氏　久光氏　林光氏　柳芳氏　里鳥氏　大熊氏　和松氏　和昇氏　和樂氏　勢氏　曉氏　め氏　兜氏　遊氏　松氏　叶氏　樂氏　昇氏

小森口氏　田口辰氏　井上巽氏　小林太二氏　根本團氏　野田高氏　杉山氏　坂倉素氏　井上素氏　新川月氏　川口子太美氏　宮本武郎氏　太田無氏　萩原うつ氏　小塩氏　乃村乃氏　水野氏　中野氏　石川華氏　本城冠氏　山下彌氏　岡田氏　篠崎氏　福門氏　長生之氏　谷聲氏　川文氏　谷文氏　田樂氏　杉絲氏　木文氏　藤兒氏　田光氏　原越氏

壽八氏　壽尾氏　壽橘氏　壽遊氏　壽鳳氏　壽美氏　壽郎氏　壽藏氏　壽涯氏　壽藏氏　壽潮氏　壽菊氏　壽昇氏　壽羽氏　壽笑氏　壽生氏　壽盛氏　壽樂氏　壽雀氏　壽樂氏　壽巴氏

河野國氏　松語氏　田月氏　湯湖氏　田光氏　保紅氏　中古氏　中五氏　岡玉氏　中司氏　中平氏　柳口氏　及樂氏　大六氏　堂樂氏　寶前寺鐵天氏　桑永氏　岡円氏　中崎氏　中田氏　柳島氏　藤谷氏　影淺氏　坂中氏　奥岡氏　寺村氏　木さか氏　齋三氏　藤三氏　平玉氏　橋を氏　本路氏　田路氏　川氏　細氏　金氏　錦氏　淺氏　田氏　錦氏　淺氏　星氏　野桔梗氏　奇氏　聲氏　松氏　鳳氏　清氏　壽氏　司氏　榮氏　生氏　え氏　幸氏　玉氏　を氏　路氏　路氏　氷氏　明氏　旭氏　葵氏　幹氏　昇氏　樂氏　六氏　口氏　平氏　司氏　玉氏　月氏　松氏　聲氏

日野金泉氏　野島貴昇氏　岡本岡花氏　歸山歸世外氏　平井軌月氏　橋本掬桔氏　乾梗氏　增城喜香氏　田鳳扇氏　三浦鏡金氏　和田喜角氏　澤部其義氏　岩木義雀氏　吉良蟻若氏　山田義昇氏　三並義昌氏　吉坂玉鳳氏　保坂有曲氏　西村游史氏　岩田末成氏　高瀨操氏　吉田美地句氏　横井三由氏　野口みなと氏　北村三葵氏　池田三芳氏　吉田三國氏　村上美豆氏　須田美義氏　鈴木松寶氏

伊藤松鶴氏　亀田松花氏　菊地秋月氏　花房紫蝶氏　山田壽瓢氏　田口司重氏　倉田司樂氏　濱口秋華氏　打矢晋水氏　西內昭平氏　永野神風氏　高瀨靜亮氏　武笠一宏氏　高品重氏　平山茶氏　福原登氏　桑安峰氏　池田美尚氏　魚崎美福氏　松岡茂雄氏　白井里華氏　近江清華氏　塚口清雀氏　佐藤聲鳳氏　井上關路氏　岡野昇氏　富田鶴氏　的井盛史氏　沼井靜氏　時

小原松樂氏

關口靜香氏　江原清昇氏　德永靜翠氏　仁木翠松氏

（地方之部）

米國　杉山陶岳氏
同　兼廣廣玉氏
大阪　氏家鶴峰氏
同　西本西紫氏
神戸　岡田源氏
大垣　吉岡十八公氏
船橋　川奈部銀司氏
下關　保良鈴鳳氏
横濱　和田和朝氏
同　鈴木香雀氏
同　田中呑笑氏
同　小林榮玉氏
同　田島集樂氏
平塚　國森鳴門氏
八幡　古賀大彌氏
靜岡　加藤壽松氏
同　森魁氏
清水　久保田聲氏
東京　岩崎彦山氏
北京　關長門氏

名譽會員

太田無涯氏

西村游史氏

右の諸氏今回本誌後援名譽會員御快諾を賜り難有御禮申上候

太棹社